

本号に掲載した4論説は、2008年5月31日、6月1日に開催されたアメリカ学会第42回年次大会（会場：同志社大学）において行われた発表（テーマ：越境移民とキリスト教伝道）を発展させて執筆されたものである。

ハワイ日本人移民とキリスト教越境伝道 —来日アメリカ宣教師ドレマス・スカッダーの事例—

吉 田 亮

はじめに

近年のアメリカ史研究にみられる顕著な特徴のひとつは、一国史から「越境史」(Transnational History)観への転換である。国境によって分断された歴史研究を見直し、複数国家や地域の「交流」「交差」史として描く傾向である。¹ 本研究と関わる領域である移民史やキリスト教史はその最たる例であるといえよう。前者においては「同化」から「越境」への視点の移行が、² 後者においては越境化する宗教組織や運動に着目する研究が増えつつある。³

本研究はこれら2領域が交差するアメリカ日本人移民キリスト教史の事例研究である。近年の当該領域の先行研究においても、「越境史」の視点がみられる。アメリカ日本人移民史では、日本人移民および日系2世の日本および帝国日本へ

1 David Thelen, "The Nation and Beyond: Transnational Perspectives on United States History," *Journal of American History* (December 1999), pp. 965–975; Ian Tyrrell, *Woman's World/Woman's Empire: The Woman's Christian Temperance Union in International Perspective in 1880–1930* (Chapel Hill: University of North Carolina Press, 1991); Ian Tyrrell, "Making Nations/Making States: American Historians in the Context of Empire," *Journal of American History* (December 1999), pp. 1015–1044.

2 John Bodnar, *The Transplanted: A History of Immigrants in Urban America* (Bloomington, Ind.: Indiana university press, 1985); Donna R. Gabaccia, "Is Everywhere Nowhere? Nomads, Nations, and the Immigrant Paradigm of United States History," *Journal of American History* (December 1999), pp. 1115–1134; Adam McKeown, *Chinese Migrant Networks and Cultural Change: Peru, Chicago, Hawai'i, 1900–1936* (Chicago: The University of Chicago Press, 2001) その他。

3 Tyrrell, ibid. (1991); Rumi Yasutake, *Transnational Women's Activism: The United States, Japan, and Japanese Immigrant Communities in California, 1859–1920* (N.Y.: New York University Press, 2004); Jennifer C. Snow, *Protestant Missionaries, Asian Immigrants, and Ideologies of Race in America, 1850–1924* (N.Y.: Routledge, 2007).

の移動の研究があり、⁴個別宗教史においても日米間に拡がるキリスト教伝道者・組織や運動の展開に注目するものが出つつある。⁵

本研究はこうした研究史を踏まえ、日本人のハワイへの移民に伴い、来日アメリカ宣教師の活動が越境し、いかに日布・日米間の人的ネットワークを形成し、政治的・文化的アイデンティティを複合化していったかを検討する。つまり、日本人のアメリカへの移民に伴うキリスト教伝道者の越境移動が、一国（地域）の枠内に限定されてきたキリスト教の史的展開をいかに流動化・複合化し、「交流」史や「架け橋」史の形成要因となっていったかに着眼する。それは越境するキリスト教伝道活動の実態をみるとことによって明らかになろう。ここでいう「越境伝道」とは、複数国家や地域間を交差し越境する伝道活動であり、特定国家や地域に根ざしたキリスト教のあり方を、地理的、文化的、政治的に流動化、複合化す

4 ユージ・イチオカ『『第二世問題』1920年～1941年—二世の将来と教育に関して変遷する一世の展望と見解の歴史的考察』同志社大学人文科学研究所編『北米日本人キリスト教運動史』(PMC出版, 1991)、同『『見学団』』上山和雄・阪田安雄編『対立と妥協—1930年代の日米通商関係』(第一法規、1994)、Yuji Ichioka, "Beyond National Boundaries: The Complexity of Japanese-American History," *Amerasia Journal* 23:3 (Winter 1997–1998), pp. vii–xi; Yuji Ichioka, "The Meaning of Loyalty: The Case of Kazumaro Buddy Uno," *Amerasia Journal* 23:3 (Winter 1997–1998), pp. 45–71; Yuji Ichioka, "A Historian by Happenstance," *Amerasia Journal*, 26:1 (2000), pp. 32–54; 小島勝編著『在外子弟教育の研究』(玉川大学出版部、2003); Toyotomi Morimoto, *Japanese Americans and Cultural Continuity: Maintaining Language and Heritage* (N.Y.: Garland Publishing, Inc., 1997); ジョン・ステファン『日本国ハワイー知られざる「真珠湾」裏面史』(恒文社、1984)、John J. Stephan, "Hijacked by Utopia: American Nikkei in Manchuria," *Amerasia Journal* 23:3 (Winter 1997–1998), pp. 1–42; Eiichiro Azuma, *Between Two Empires: Race, History, and Transnationalism, in Japanese America* (N.Y.: Oxford University Press, 2005); 米山裕『『日系アメリカ人』の創造—渡米者（在米日本人）の越境と帰属』西川長夫他編著『20世紀をいかに超えるか—多言語・多文化主義を手がかりにして』(平凡社、2000)、吉田亮編著『アメリカ日本人移民の越境教育史』(日本図書センター、2005)。

5 竹中正夫「同志社とハワイー戦前の軌跡をたずねて」『同志社アメリカ研究』(1986) 79–92; 島田法子「奥村多喜衛と渋沢栄一—日米関係からみたハワイにおける排日予防啓発運動」『日本女子大学紀要』43 (文学部、1993) 39–56; Brian Masaru Hayashi, 'For the Sake of Our Japanese Brethren': Assimilation, Nationalism, and Protestantism among the Japanese of Los Angeles, 1895–1942 (Stanford, Calif.: Stanford University Press, 1995); Yasutake, ibid. (1998); 太田雅夫「原田助とハワイ大学」『キリスト教社会問題研究』46 (1998) 179–229、赤松美和「1920年代のフレンド平和奨学金制度(Friend Peace Scholarships)とハワイのアメリカ化」『キリスト教社会問題研究』49 (2000) 1–45、Hiromi Monobe, "Shaping an Ethnic Leadership: Takie Okumura and the 'Americanization' of the Nisei in Hawai'i, 1919–1945" (Ph. D. Diss., American Studies, University of Hawai'i at Manoa, 2004); 吉田亮『ハワイ日系2世とキリスト教移民教育—戦間期ハワイアン・ボードのアメリカ化教育活動』(日本図書センター、2008、以下拙著『ハワイ日系2世』と略す)。

る可能性を持っている伝道活動のことである。

本事例研究では、ハワイへの日本人の移民に伴い、来日アメリカン・ボード (American Board of Commissioners for Foreign Missions, 以下 ABCFM と略す) 宣教師の伝道活動がどのように越境化し、一国（地域）を中心とするキリスト教の史的展開が流動化、複合化したかをみていく。本研究では、ドレマス・スカッダー (Doremus Scudder, 1858-1942) を、特に彼がハワイでのキリスト教伝道活動に関与した1901年から1916年までの15年間を事例に検討する。彼は、ABCFM の元日本宣教師であり、ハワイアン・ボード (Board of Hawaiian Evangelical Association, 以下 HEA と略す) 日本人伝道部長オラメル・ギューリック (Orramel H. Gulick) を支えるために赴任したが、後に HEA 内外の要職を歴任し、現地の日本人移民および2世の伝道・教育活動のみならず、HEA による現地での伝道・教育活動の方向付けを行う活動を展開したまさにキー・パーソンである。さらに、戦間期に HEA が展開した人種間交流、越境伝道・教育論及び活動の原型ともいべき存在である。

1 背景

ハワイにおける日本人移民伝道は、1810年、ボストンに設立された ABCFM による海外伝道の結果として構築されるに至った世界各地の伝道拠点を結ぶ越境伝道ネットワーク、及び日本からハワイへの移民という2つの越境的要素の影響を受けて1885年に始まった。⁶ ABCFM が1820年に開始したサンドイッチ島（現在のハワイ）と、それから約50年後の1869年を端緒とする日本という2つの伝道地を繋いだ人物は O. ギューリックであった。ギューリックは、第3回伝道団として ABCFM がボストンからサンドイッチ島に派遣したピーター及びルイサ・ギューリック夫妻 (Peter Johnson and Louisa Lewis Gulick) 夫妻の次男であり、1871年に宣教師として日本伝道に従事した。シドニー・ギューリック (Sidney L. Gulick) は彼の甥にあたる。一方、ハワイへの日本人移民は1868年にホノルルに上陸したいわゆる「元年者」をその嚆矢とするが、本格的な移民は1885年の「官約移民」に始まり、15年後の1900年にはハワイ全人口の40%を占める勢力となった。HEA によるハワイの日本人移民伝道は、1885年に着手され、87年にサンフランシスコの日本人メソジスト信徒の協力によって教勢が拡大したが、メソジスト派が2年後にハワイから撤退した後、HEA が日本人伝道を再編

6 摂著『ハワイ日系2世』参照。

する必要が生じていた。HEAは1894年に日本人伝道部を設立し、ハワイ生まれで、ABCFM日本伝道宣教師であったO.ギューリックを日本人伝道部長に任命した。日本人移民人口の増加に伴う伝道活動の拡大に対応するために、HEAがギューリックの補佐役として招聘したのがドレマス・スカッダーであった。⁷スカッダーは1858年12月15日、帰国中のヘンリー（Henry, ABCFM宣教師、インド赴任）の9番目の子として誕生した。1880年、イエール大学を卒業後、ユニオン神学校（1880～82年）、コロンビア医科大学（1881～82年）、ノースウェスタン大学医学校（シカゴ医科大学、1882～84年）に学び、医学博士を取得。1885年1月、ABCFM宣教師として北日本ミッションの新潟ステーションへの赴任が決まった。当地にはディヴィス（R. H. Davis）とO.ギューリック等が一足先に赴任していた。同年2月にスカッダーは横浜に到着し、同年春に新潟に赴任した。同地におけるエディンバラ医療宣教会が設立した病院を担当することになった。彼は病院の維持には消極的で、まもなく病院を閉鎖し（1886年10月）、伝道活動に専念することになる。また、新潟第一基督教会の創設（1886年10月2日）と1年後の会堂建築に強力な支援をする。当時の牧師は成瀬仁蔵であった。伝道事業においては、日本人信徒による自給伝道や教会合同を自説として提唱。その結果、新潟第一基督教会は1887年に自給を宣言することになった。1889年4月3日に同教会は新潟一致教会と合同し、「新潟基督教会」（無所属、独立）を組織した（1890年に再度分裂する）。教育事業においては、新潟女学校と北越学館に創設者のひとりとして深く関与。両校は1887年に開校した中等教育機関である（1894年に経営難のために休校）。1889年9月21日、病気のケイディー（Virginia A. Cady）に付き添って一家して帰国し、しばらくカリフォルニア州パサディナで静養後、1889～1901年に、アメリカ本土の諸教会で牧師職に従事することになった。シカゴ勤労者教会（1889～92年）、ブルックリン東教会（1892～95年）、ウォーバン第一会衆教会（1895～1901年）の牧師に就任。特にシカゴ勤労者教会では彼の活躍は高い評価を受け、同教会は「ドレマス会衆教会」と改称したほどであった。1898年にはウィットマン大学から名誉神学博士号が授与されることになる。1901年から16年までハワイ伝道に従事した後（後述）、東京ユニオン教会より牧師招聘の誘いを受け、1916年11月27日、来日し、同教会の初代専任牧師として、来日ヨーロッパ系外国人のための教会会堂の獲得と伝道プログラムの充実のため

7 スカッダーについては、同志社大学人文科学研究所編『来日アメリカ宣教師』（現代史料出版、1999）、本井康博「スカッダー一家の人びと—L. L. ジェーンズと熊本バンドをめぐって』『同志社談叢』7（1987）53-114参照。

に尽力した。1920年5月～1922年、ボストンに移り、ボストン地区教会連合幹事に就任した。1922年、交通事故のため引退し、カリフォルニア州クレアモントへ移り、近隣の教会を応援した。1925～1926年、フランス、インド、中国、日本（26年夏に6週間）などを歴訪。1942年7月23日、プエンテ（カリフォルニア州）で死去した（84歳）。

1901年、スカッダーはハワイの日本人伝道への招聘を受け、その準備のために渡日後、1903年にホノルルに到着し、HEAの日本人伝道部長に就任した。ハワイではキリスト教界の要職を歴任した。彼はHEAの総主事（General Superintendent, 1904–07）に、HEA機関誌『フレンド』の編集長（1904–16）に、セントラル・ユニオン教会牧師（1907–16）にそれぞれ従事し、さらにミッドパシフィック学院（Mid-Pacific Institute, 以下MPIと略す）の役員（1909–15）として、ハワイのキリスト教化・アメリカ化だけでなく、アジア系2世への中等教育機会拡大とアジア系2世クリスチヤン指導者養成に尽力した。

2 日本人伝道・教育の強化

スカッダーがHEAの伝道活動に従事した頃、HEAは伝道方針をめぐって大きな転換点を迎えていた。1900年にハワイがアメリカ合衆国に併合され准州になったこと、19世紀半ば以降ハワイの基幹産業である製糖業がアジア系労働力をプランテーションに大量導入したことで人種・民族別人口比率に大きな変化をもたらしたことが背景にあった。1900年から20年にかけてHEAのアジア人信徒数は急増していくが、中でもその成長が顕著であったのが日本人信徒である。1900年に548人であったが、10年後に787人に、そして20年後には1,622人というよう、20年間でほぼ3倍に膨張していた。⁸ こうした新移民集団及び第2世代に対する伝道活動の強化は急務の課題であった。

(1) 再渡日

スカッダーによるハワイ日本人伝道強化活動は、1903年に彼がこの任務に就くよりも2年前、彼がハワイへの招聘を承諾した後に来日した時から始まっていた。1901年春、スカッダーはHEAより、ギューリックの協力者として現地日本人伝道への招聘を要請する手紙を受け取った。⁹ 彼は日本語の習得と日本の状況把握

⁸ HEA, Annual Report, 1900–20.

⁹ Letter, from D. Scudder to O. P. Emerson, July 16, 1901, HEA Collections (Mission Children's Society Library 所蔵)。

のために半年間の滞日許可を条件に、¹⁰ この招聘を受諾した。¹¹

1902年2月に東京に到着し、しばらく日本語を学習した後、¹² 彼の甥でドレマスの後任として HEA 日本人伝道部長となるフランク（Frank S. Scudder）の赴任地である長野に短期間滞在し、その間にハワイで働いた日本人移民帰国者との交流を行い、木村清松や元ヒロ教会牧師からハワイでの活動についての情報を得ようとした。¹³

スカッダーは1902年7月2～10日開催の第13回日本ミッション年次大会に出席した。同大会ではハワイ日本人伝道に関わる以下のような重要な決議がなされた。¹⁴

HEA が訓練を受けた日本人伝道者を獲得することの重要性は評価しているが、日本での伝道者供給の不十分さや、伝道者育成の困難性に鑑みて、日本からの伝道者供給の増加案は賢明ではないので、HEA がハワイで人材養成の可能性を検討するよう提案したい。HEA による日本人伝道の果実を保持するために、ハワイから帰国した日本人への伝道事業の委員会を設立し（S. L. Gulick が担当）、HEA に対して帰国者のクリスチャンのリストを報告するように要求する。…

この決議には、日本人伝道者の海外への流出に規制をかけながらも、HEA によるハワイ伝道で得られた果実を確保したいという、日本ミッションの思いが表現されていた。前者の伝道者養成案が小崎弘道による東京伝道学校設立につながり、後者がスカッダーによる移民伝道ネットワーク形成のための活動に展開することになる。

(2) 移民伝道ネットワーク形成に向けて

スカッダーはこれら2決議を受けて、ハワイの日本人伝道拡大のために、来日中に2つの行動を起こした。第1に、ハワイの日本人移民への個別伝道に着手するための、そしてハワイ伝道の果実を日本伝道に生かすための、ハワイ日本人移

10 Letter, from D. Scudder to O. P. Emerson, July 16, 1901, HEA Collections.

11 Letter, Committee on Home Missions, HEA, Minutes, August 22, 1901 & October 14, 1901, HEA Collections.

12 Letter, from D. Scudder to O. P. Emerson, March 31, 1902, in *Friend* (May 1902).

13 Letter, from D. Scudder to O. P. Emerson, May 28, 1902, HEA Collections.

14 The Thirtieth Annual Meeting of the Japan Mission, Minutes, 1902, by D. W. Learned, ABCFM Correspondences (同志社大学図書館所蔵).

民の親族訪問であった。移民県（広島、山口、福岡、熊本他）在住の伝道者や信徒、国務大臣や外務副大臣、県知事の協力を得て、これらの県で集会場（仏教寺院、学校、役所、公民館、個人宅等）に約8,500人の移民の親族を集め、講演会を行った。¹⁵ 演題は、ハワイの説明、現地の日本人の現状や直面する試練、HEAについて、日本人移民への伝道活動であった。講演の後、スカッダーは移民の親族よりハワイの移民本人宛のメッセージ2,551人分を受け取った。¹⁶ 彼は移民県の訪問によって、ハワイで改宗した日本人移民が帰国後に信仰を喪失しないようにするために、帰国する移民信徒の名前を記録し、S. ギューリックに通知し、移民本人が帰国後に近隣の伝道者の訪問を受けて信仰を維持できる環境をつくり、また帰国する移民信徒の受け入れ委員会を横浜、神戸、長崎に設置し、迎え入れの準備をしようとしていた。この行動は、家族のメッセージをハワイの本人に伝えることで、移民の家族との信頼関係を確立するという意味もあった。これによって、ハワイでの伝道果実を、日本伝道で生かすことができて、「神の摂理によって、ハワイは日本の歴史において農業従事者への効果的な伝道事業に門戸を開ける」ことができるようになったとスカッダーは考えたのである。¹⁷ スカッダーは、1903年5月8日にホノルルに到着し、日本人伝道に従事することになるが、日本の親族のメッセージを伝えるためにマウイやハワイ島を訪問し、多くの日本人と面会したようである。¹⁸ 一方で、スカッダーはハワイの日本人信徒に関する情報を掌握する努力もおこなった。1903年7月29日、HEA 日本人伝道委員会(Committee on Japanese Work)は以下の推薦を票決した。「1、日本人伝道者は、その伝道地での日本人信徒全員のリストを日本の住所付きでスカッダーに送付する。2、また伝道者は、もし可能なら、前もって少なくとも一ヶ月前に日本に戻ろうとする人々の名前をスカッダーに送付すること」という内容であった。¹⁹

(3) 日本人伝道者養成問題と東京伝道学校の設立

次に、日本人伝道者を確保する方法である。従来、HEAは日本人伝道者を現地で養成するのではなく、日本から招聘する形態をとった。伝道者斡旋のエージェントとして、ABCFMが人的・財政的にその設立とその後の運営に大きく寄与

15 “Among the Farmer Folk” A Letter from Dr. Scudder, *Friend* (February 1903).

16 “Letter, from Dr. Scudder,” *Friend* (February 1903).

17 Letter, from D. Scudder to O. P. Emerson, *Friend* (March 1903).

18 “Japanese Work,” *Friend* (October 1903).

19 Committee on Japanese Work, HEA, Minutes, July 28, 1903, HEA Collections.

した同志社英学校にあって、その創設以来一貫して新島襄の協力者であり続けたジェローム・ディヴィス (Jerome D. Davis) に白羽の矢を当てた。しかし同志社で育成した伝道者を、成長する ABCFM の日本伝道ではなく、ハワイの日本人伝道のために活用するということを、日本ミッションは黙認し続けることはなかった。上記の決議は、そうした人材流出に歯止めをかけることを意図していた。

スカッダーは日本から伝道者を確保する別のルートを模索した。1902年6月、日本組合教会のリーダーのひとりで、元同志社大学社長、当時靈南坂教会牧師であった小崎弘道が日本人移民への伝道応援のためにハワイを訪問することが決定した際、スカッダーは小崎の来布を HEA に重く受け止めさせるために、「日本で広く知られており、国家の最も重要な関心事の多くと密に関わっている」小崎夫妻による「伝道活動が、日布両方での主の王国前進にとって新時代を意味するものとなるように共に祈りましょう」と HEA 通信主事宛の手紙に書いた。²⁰ スカッダー自身は、小崎とは14年前に面識があった。彼はこの記事で、小崎の来布への大きな期待感を表明していた。HEA の機関紙『フレンド』(*Friend*) は小崎のハワイでの活動を同年9、10月号に掲載し、小崎の「訪問は、信者の小規模な集団とその日本の母教会との間の絆を大きく強くするだろう。クリスチャンの絆の強化は大きな利益がある」と評した。²¹

小崎はハワイ訪問によって、海外在住の日本人への伝道の必要性、そしてそのための伝道者養成の緊要性を痛感した。小崎はハワイから帰国後、『東京毎週新誌』(1902年10月31日) の社説「布畦の伝道」で、ハワイの日本人伝道が日米両国の伝道事業に及ぼす積極的な影響について以下のように述べている。ハワイ在住6万の同胞のキリスト教化に成功するかどうかは日本の伝道にも大きな影響がある。しかしハワイの日本人伝道での伝道者不足は深刻である。「只一番困難なるは孰れよりも其伝道師を得るかの一事がである。併し此も別に伝道師養成の道を設くる事をせば出来難き事ではなかろう」と述べている。²² 小崎が靈南坂教会に東京伝道学校を設立するに至った経緯について『フレンド』(1903年8月) は以下のように紹介している。²³ 小崎はハワイから帰国後「日本の伝道にとってハワイが戦略的に重要であるという深い印象を受けた」が、日本の伝道者を海外

20 Letter, from D. Scudder to O. P. Emerson, June 28, 1902, in *Friend* (August 1902). この記事は『フレンド』同年8月号に掲載された (“Letter from Dr. Scudder,” *Friend*, August 1902)。

21 O. H. Gulick, “The Japanese Summer School and Conference” *Friend*, (September 1902); “Field Notes—Japanese Notes,” *Friend* (October 1902).

22 小崎「布畦通信」『東京毎週新誌』(1902年10月17日) をも参照。

23 “A Rare Opportunity,” *Friend* (August 1903); “Another Gift of Hawaii to Japan,” *Friend* (August 1903).

に流出させたくないで新しい養成機関設立を考案した。小崎の目は台湾、中国、フィリピン、太平洋岸の日本人に向いており、小崎はハワイに限定せず、広く海外在住同胞への伝道者養成を念頭に置いていたと報じている。

スカッダーは小崎による伝道者養成学校に HEA から財政支援を得られるよう働きかけを行った。彼は 1902 年 12 月 17 日付の HEA 宛書簡で「神学校 (Theological School) について」、「日本人の場合に関しては、小崎がその困難 (性) を解決するだろう」と述べている。²⁴ 約 8 ヶ月後の 1903 年 7 月 29 日、HEA 日本人伝道委員会 (Committee on Japanese Work) で、スカッダーが小崎弘道からの手紙を読み、「神学校」の計画を進めるにあたり、6 人の奨学金として 50 ドルを、つまり年間 300 ドルの援助を小崎が HEA に要求していることを紹介した。同委員会は本件を財務委員会で検討するよう推薦をおこなった。『フレンド』はさっそく 1903 年 8 月号で小崎の神学校案を紹介し、²⁵ 新伝道者を一貫して得られるという点で「我々は徹底的に合意する」と全面的支持を表明した。結果的に、1903 年 9 月 30 日に開催された日本人伝道及び教育委員会の合同会合 (Meeting of Joint Committee on Japanese Work and Education) で、HEA は小崎の神学校に対する財政支援 (上記) を承認した。²⁶

スカッダーは小崎の神学校設立に大きく関わったようである。HEA の会計を長きにわたって務めたリチャーズ (Theodore Richards) は 4 年後に当時を回顧して、「新伝道者を得るという小崎の奨学金計画は主にスカッダーに拠っている」と述べている。²⁷ しかし、1908 年に日本人伝道委員会による 180 ドル 64 セントの超過支出が HEA で問題となり、その原因のひとつに小崎の学校への支援があったと指摘されていることから、²⁸ 同校への支援は HEA の財政状況が悪化したことが原因として打ち切られた可能性が高い。1910 年 5 月に HEA は日本人委員会と HEA の会合で小崎に対する感謝の票決をしており、²⁹ この時点で HEA と小崎の東京伝道学校との関係が終わったことを明確にした。

東京伝道学校は「布哇に移住せる七万余の我同胞を始め海外其他凡ての伝道に志す者を養成せんとの目的」を持ち、1903 年 10 月 6 日に 10 名程の生徒とともに靈

24 Letter, from D. Scudder to O. P. Emerson, December 17, 1902, HEA Collections.

25 "A Rare Opportunity," *Friend* (August 1903); "Another Gift of Hawaii to Japan," *Friend* (August 1903).

26 Meeting of Joint Committee on Japanese Work and Education, HEA, Minutes, September 30, 1903.

27 "Scudder and the Board," *Friend* (August 1907).

28 Letter from Puley Home to W. W. Hall, February 25, 1908, HEA Collections.

29 Ibid.; Regular Meeting, HEA, Minutes, May 6, 1910, HEA Collections.

南坂教会堂を教室に開校した。³⁰ ハワイ伝道に従事した卒業生中、宮森武二郎は1901年に同志社神学科卒業後、笠岡で伝道者として1年以上働き、その後東京伝道学校で1年間学び、ハワイに1905年4月に伝道者として渡航、一時ヌアヌ街日本人組合教会に赴任した後、マウイ島のマカウェリに着任した。³¹ 1910年には間宮昌三と山口金作が同校の卒業生としてハワイ伝道に加わり、³² 山口はヌアヌ街組合教会に、間宮はマウイ島ワイルクに赴任した。³³ 尚、学校の費用の半額は小崎の教会員である移民会社の幹部が支援することになった。³⁴

(4) 日系2世の教育問題

20世紀初頭、前述のようにアメリカの准州化の流れの中で、移民2世のアメリカ市民化が重要課題になっていた。移民の中でも日本人は1900年の時点ですでに総人口の40%を占め、第2世代の数も急増していた。こうした日系2世への教育活動に仏教会は早くから関心を示していた。ハワイに於ける仏教の布教活動は1890年代末に開始され、日本人移民に急ピッチで広がっていった。仏教会は移民2世に対する日本語教育に従事することで、第2世代への影響力をも拡大しつつあった。O. ギューリックは1898年の『年次報告』で早くもキリスト教伝道に競合・敵対する勢力として仏教会を位置づけて懸念を表明していた。³⁵ HEAの日本人伝道委員会では1903年7月29日の会合で、「仏教徒開教使とその宗教の特徴と、その教えがキリスト教徒にどのような悪影響があるかを調べるようHEA本部に要求する」という決議をするほどであった。³⁶

日本人伝道の強化のためにハワイに赴任したスカッダーが日系2世の教育活動

30 教界「東京伝道学校の設立」『基督教世界』(1903年8月27日)、教界「東京伝道学校」『基督教世界』(1903年10月1日、10月15日)。尚、『七十年間の回顧』によると、5年間の在学生は54人、20人の卒業生を出し、そのうち20余人直接間接に伝道に従事しており、例えば三宅正彦、小谷秀三、間宮昌平、高橋定由、福島熊蔵(米国)、小北皎次郎(米国)、中館與三郎(米国)、前田龜太郎(ハワイ)、山口祥吉(南洋)であると記している。

31 “Arrival of a Japanese Evangelist,” *Friend* (June 1905).

32 Japanese Committee, HEA, Minutes, May 4, 1910.

33 Frank S. Scudder, “Notes from the Field,” *Friend* (November 1910). 宮森と山口については、Mary Ishii Kuramoto, *Dendo: One Hundred Years of Japanese Christians in Hawai'i and the Nuuanu Congregational Church* (1986), 56をも参照。

34 “A Rare Opportunity,” *Friend* (August 1903); “Another Gift of Hawaii to Japan,” *Friend* (August 1903). 『七十年の回顧』(小崎全集刊行会、第3巻、1938)によると、「此招聘はスカッダア博士の斡旋による所が多くかった」とスカッダーの関与があったこと、小崎の渡航費については日向輝武広島移民会社社長(靈南坂教会員)が負担したと記している。

35 HEA, Annual Report, 1898.

36 Committee on Japanese Work, HEA, Minutes, July 29, 1903, HEA Collections.

に強い関心を示すのは当然であった。彼は HEA の通信主事に就任する際にパークー (Parker) 宛の書簡で、ハワイのキリスト教化再建案を提示し、そのひとつに日本人児童の学校への活動の奨励を擧げるほどであった。³⁷ その教育活動のひとつは日本語教育に関するものであった。スカッダーは仏教会の影響力の及ばない日本語教育を日系 2 世に施す必要性を認めており、そのことはアメリカ市民育成と矛盾しないと考えていた。彼は「我々の学校問題」で日系 2 世教育問題について以下のように述べている。³⁸ 生粋のアメリカ人で、市民となるこども達は、公立学校で忠誠心をもつ知的な市民として成長するための十分な教育を受けられていないので、補完が必要である。子どもに日本語を継承したいという親の思いと、次の100年間に少なくとも日英両語が話せる市民を必要とするというハワイ現地のニーズに対応するために、仏教徒は日本語教育に従事しているが、それらはアメリカ主義に反抗しており、排外主義の考えを引き起こす誤りを犯している。日本人クリスチャンはそのために、日系児童の学校を組織し、「狭隘な心」に対抗しようとしている。それらの学校では星条旗と日章旗、君が代とアメリカ国歌を平等に歌うし、両親の祖国に愛情を持たせることがあるにしても、アメリカに対する献身において誰にも引け目をとらせない教育を施していると。スカッダーは、「非アメリカ的」「排外主義的」な性格をもつ仏教会による日本語学校の日系 2 世への影響力を牽制し、公教育を補完する日本人クリスチャンによる日系市民教育の重要さを訴えていた。その担い手として、日本人教会の教育事業と MPI の活動に注目した。

スカッダーは仏教会が日本人クリスチャンの 2 世教育活動を妨害している具体的な例として、曾我部四郎がホノムに設立した私立学校（ホノム義塾）を挙げている。³⁹ 彼は、同校が教育内容や教師の資質において優れているにもかかわらず、仏教徒はクリスチャンの経営で繁栄しているという理由だけで嫉妬し、対抗する学校を設立したと、仏教会を批判した。1911年、スカッダーがその委員のひとりでもある日本人伝道委員会（HEA）は、日本語教育から反アメリカ主義の勢力である仏教会（特に本願寺）の影響力を弱めるための方策のひとつとして、無宗派の独立日本語学校を設立し、ワイアルア地区の公立学校校舎を放課後に同日本語学校のために開放するように公教育局に対して要求した。⁴⁰ スカッダーはこの

37 Letter, from D. Scudder to H. H. Parker, January 18, 1904, HEA Collections.

38 “Our School Problem,” *Friend* (May 1904).

39 “Beggary Tactics,” *Friend* (November 1908). ホノム義塾については、中野次郎『ホノム義塾—曾我部四郎伝』(1985) 参照。

40 “Neglected Opportunity,” *Friend* (July 1911).

行動を高く評価し、日本人伝道委員会の要求は「アメリカ主義のために先手を打つ独自な好機を提供する」ものである、もし公教育局がこの要求を承認すれば「我々と密な関係を持とうとしている日本人人口を獲得するという外交的に顕著な成果を」得るだけでなく、もっと根源的な問題である25年後に巨大勢力となる日系をはじめとするアジア系集団のアメリカ市民化に寄与すると述べた。さらに、「なぜ官立学校が国旗を挙げながら、彼（女）らの心に永遠に母語への愛を持たせてはいけないのか？　この要求を承認することで、なぜ彼（女）らの魂に外国の火を焚き付けることによってアメリカから彼（女）らを引き離そうとする一種の組織から彼（女）らを引き離そうとしないのか？　先見の明のある愛国者が検討する価値のある深刻な問題である」と彼は読者に警鐘を鳴らした。⁴¹

一方で、スカッダーは日系2世のアメリカ化を HEA 主導で進めるための私立教育機関である MPI の設立に深く関与した。⁴² 同校設立時の規則 (By-law) には、「本法人の名称はミッドパシフィック学院であり、キリスト教的、学術的、産業的教育を施し、管理委員会が決定する男女の生徒達を訓練するために設立された、HEA が同校の全ての土地、建物を所有し、全ての備品を提供し、全ての財政的責任を果たす」とあるように、⁴³ HEA が運営するハワイアン女子及びアジア系男子を主要な対象とするキリスト教初等・中等教育機関（後に中等教育機関に一本化する）であった。スカッダーは MPI 設立に際し、本校の「学術的な特徴は実業的なものに完全に従属しない。幼いときにこの学校で訓練を受けた男女は、靈が動くように、特別予備校やカレッジに進学する」と述べ、⁴⁴ MPI が高学歴を持つクリスチャン指導者育成のための教育機関を目指すことを明白にした。HEA はハワイアン男女のための学校 6 校、宣教師子女のための学校を 2 校それぞれ設立してきたが、⁴⁵ アジア系についてはミルズ（1892）のみであった。⁴⁶ それ

41 日本人伝道委員会は、リフエ（カワイ島）とワイルクでも独立日本語学校設立を推進した（Japanese Committee, HEA, Minutes, August 29, 1911; November 3, 1911）。

42 その前身はハワイアン女生徒のためのカワイアハオ神学校 (Kawaiahao Seminary, 1864年創立) とアジア系男子生徒のためのミルズ学院 (Mills Institute, 1892年創立)、及び奥村多喜衛の日本人寄宿学校 (Japanese Boarding School, 1896年創立) であり、HEA は1905年に MPI 創設を決議し、1908年に 3 校が合併してハワイ准州政府より学校法人として認可を受けた。MPI については拙著『ハワイ日系2世』参照。

43 Board of Managers, MPI, Minutes (MPI 所蔵)。

44 “Hawaii’s Port Arthur,” *Friend* (October 1905).

45 男子のためにラハイナルナ（1831）とヒロ寄宿学校（1836）を、ハワイアン女子のためにマオナオル（1861）、カワイアハオ（1865）、コハラ（1873）、カメハマハ（1894）を、宣教師子弟のためにプナホウ（1841）とカメハメハ（1887）を設立してきた。

46 John L. Hopwood, “Private Schools of Hawaii,” *Friend* (October 1921).

ゆえ、HEA は MPI によってこれまで手薄であったアジア系を対象とする学校教育活動を充実発展させようと考えたのである。スカッダーは1905年より同校の理事として関与し、1908年に MPI が法人となった際に発起人となり、1909年から東京ユニオン教会の牧師として招聘される1916年まで理事となり、後に副理事長を歴任した（1914年）。1910年より教育委員長となり、カリキュラム編成から教員の選抜・任用に至るまで采配を振るった。彼が在任中に、日本語・中国語及び韓国語クラスの開設、中等教育コースの拡大、チャペル・アワーの義務化や聖書研究や宗教訓練授業の強化、農業や産業教育よりも高等教育機関進学への強調点の移行などに着手した。このことによって、MPI が戦間期に力点を置いた高等教育機関への進学を視野に入れた「ファーストクラス」の知的訓練、キリスト教的品性教育、2言語教育、労働倫理教育の基盤を形成し、彼の働きは MPI 役員会から高い評価を得ていた。⁴⁷ スカッダーは MPI を東西文化交流のための教育機関としても期待していた。彼は MPI が環太平洋諸国からの留学生受け入れ機関となって、東西文化交流の担い手となることに期待した。⁴⁸ その考えが結実した具体例として、日本人留学生を中心とする英語を母語としない生徒のための英語特別クラスの強化や、1911年にフレンド平和奨学生の受け入れがあった。フレンド平和奨学金は、1911年にリチャーズ（Theodore Richards）が日米友好関係を進めるために開設した奨学金制度であり、1911年から21年までは日本人のアメリカ留学を、22年から27年まではハワイ在住の日系2世の高等教育機関への進学を、28年から40年までは日系2世の同志社大学への研修を支援するものであった。⁴⁹ 1911年から40年までの同制度実施期間中、そのうち11年から17年までは、日本人留学生の受け入れ先は MPI であった。MPI に学んだ同奨学生の中には、同志社卒業生である柏木隼雄や満永寅一もいた。

3 ハワイ伝道の再編

20世紀初頭にスカッダーが HEA の通信主事に従事した頃、HEA は伝道方針

47 Board of Managers, MPI, Minutes, November 29, 1916. 『フレンド』（“Dr. and Mrs. Scudder in Hawaii—A Symposium,” December 1916）では、MPI でのスカッダーの働きを讃えて、MPI の発展はスカッダーの功績のひとつである、MPI という名称はスカッダーの提案であり、設立当初から役員として関わり、教育方針として高度な学業基準とキリスト教的品性の育成を強調したと述べている。

48 “Hawaii's Destiny,” *Friend* (October 1908); “Dr. Scudder Declines Mainland Call,” *Friend* (August 1909).

49 同奨学金については拙著『ハワイ日系2世』参照。

をめぐって大きな転換点を迎えていた（前述）。そのひとつはアジア系人口の急増であり、もうひとつはその逆にハワイアン人口の減少であり、その結果としてのHEAの主軸であるハワイアン教会の衰退であった。ハワイの准州化による政治的混乱やハワイアン指導者の不足が大きく影響していた。ガラガー（Mark E. Gallagher）は、ハワイアン信徒数が1900年から04年かけて毎年減少の一途をたどっていたと指摘している。⁵⁰ HEAの年次報告書では、ハワイアン教会での伝道者不足の深刻さ、神学校出身者による補強の必要性が頻繁に報じられていた。⁵¹

さらに、旧世代の指導層では対応できない、英語話者のハワイアンをキリスト教化・アメリカ化し、他の移民集団と共に、英語を主言語とする他人種・民族教会に糾合するための組織改革が求められていた。スカッダーはパーカー（H. H. Parker）宛の書簡で、⁵² HEA通信主事就任に当たってハワイの伝道再建案を以下のように提示した。「ハワイアンの次世代の人口に将来の教会の要素を確保することである。この仕事をどのようにするかの鍵となるのは、少数の英語話者の教会であることは疑問の余地がない」とする。そこで、ハワイの伝道拠点に英語話者のアメリカ人国内宣教師を配置すること、またハワイアンを本土のムーディ聖書養成学校などに留学させること、そして各地域での合同会合で可能な限り多様な国籍の教会と一緒にして各島の伝道区会の会員にすることを提案した。

スカッダーは自らの案を実行するに当たり、先ず、HEAの会則を1903年の年次大会で変更した。これまでハワイアンと一部の指導的なアングロのみが大会に出席できるとする規則を変更し、「すべての按手を受けた牧師、各島から選ばれた代表、各外国人集団から1名ずつの代表で構成する」というように、ハワイ在住の全人種・民族集団に開かれた組織に改編した。⁵³ 翌年には各人種・民族集団ごと（例、ハワイアン、ポルトガル系、中国系、日系）に伝道委員会を設置し、⁵⁴ 個別集団ごとの伝道活動の統括システムを確立した。こうした組織改編によって、HEAへの諸集団の結集力とHEAの諸集団への統制力を同時に強めようとしたのである。

次に、ハワイアンへのキリスト教伝道活動の再編、及びそれに伴うHEAの英語伝道活動の強化についてである。HEAはアメリカ伝道協会（American

50 Mark Edward Gallagher, “No More A Christian Nation: The Protestant Church in Territorial Hawai‘i, 1898–1919” (Ph. D. Diss., History, University of Hawai‘i, Manoa, 1983).

51 HEA, Annual Report, 1899, 1903.

52 Letter, from D. Scudder to H. H. Parker, January 18, 1904, HEA Collections.

53 HEA, Annual Report, 1903.

54 HEA, Annual Report, 1904.

Missionary Association, 以下 AMA と略す) の財政支援を得て(後述)、アメリカ国内宣教師 6 名をエージェントとして各島に配置した。彼らは島毎に、特にハワイアン新世代への英語伝道に力点を置き、その際には他人種集団をも伝道活動に糾合して、多人種・民族礼拝や伝道活動を重点的に展開したため、それらの活動から英語を主言語とする多人種・民族合同教会(Union Church)が誕生していった。⁵⁵ 1905年にはコナに合同教会がベーカー(Albert Baker)によって組織され、1911年までに11の合同教会が設立されていた。⁵⁶ スカッダーは個別的に、セントラル・ユニオン教会牧師在任中に、オアフ島カリヒ地域在住の同教会信徒を組織してカリヒ合同教会(Kalihi Union Church)を1913年に設立した。⁵⁷

スカッダーはこうした伝道再建のために必要な費用をアメリカ本土から得るために、AMA、⁵⁸ 国内伝道会(Home Missionary Society)と協議を開始することを提言した。1905年、HEA はスカッダーを含む 4 名の代表団を本土の東海岸に派遣し、⁵⁹ 会衆教会に対して、ハワイのキリスト教事業が会衆教会全体の盛衰に大きな影響を及ぼすと訴え、「新伝道時代が到来した」ハワイへの支援を求めた。⁶⁰ AMA については、1904年中に同代表団と AMA 執行部が何度か会合を持った。その後スカッダーは1905年の年次大会で「ハワイアン、太平洋沿岸伝道」というテーマの講演を行い、さらに彼は AMA の要請で全米で 3 ヶ月間の募金運動を行った。その結果、AMA は特に HEA の活動中、アメリカ国内宣教師、中国人及び日本人伝道者の給料及び活動費に対して総額8,000ドルの援助を行うことを決めた。⁶¹

スカッダーが HEA の組織改革を通じて展望していたことは、ハワイのキリス

55 HEA, Annual Report, 1904-7.

56 Albertine Loomis, *To All People: A History of the Hawaiian Conference of the United Church of Christ* (1970), pp. 367, 380.

57 Jean L. Dabagh and Suzanne E. Case, *One Hundred And One Years: Central Union Church 1887-1988* (1988), 59.

58 アメリカ伝道協会は南北戦争後に黒人の教化活動を推進するために設立された国内伝道団体であるが、後に太平洋岸のアジア系教化活動をも担当することになる。拙著『アメリカ日本人移民とキリスト教社会』(日本図書センター、1995) 参照。

59 代表団はスカッダー、ウェスター・ヴェルト(W. D. Westervelt)、ジョーンズ(P. C. Jones)、ビンガム(Hiram Bingham)から構成されていた。

60 HEA, Annual Report, 1905.

61 AMA が HEA の活動に支援を踏み切った理由は、「中国と日本でのミッションという偉大な伝道地が背後に存在する。また我々の新しい島領土での事業に支援するのは国内宣教師の責任である。これはアジアへの扉であり、広範な地域での再生に大きな意味を持つ」という認識になつてのことであった(AMA, Annual Report, 1905)。

ト教化・アメリカ化をアングロが指導し、英語を主言語として人種・民族間融合を進展させることであった。そのことで、後述するように、アメリカ本土だけではなく国際社会に、キリスト教コミュニティのひな形を示そうとしたのである。

4 ハワイのアメリカ化論

(1) 人種間交流のモデル

20世紀初頭のハワイではアメリカの准州化や人口変動など急激な社会変動が起こっていた。スカッダーはそのただ中で HEA の伝道責任者として日本人だけでなく、ハワイ全体の将来について考えながら伝道方策を打ち立てなければならなかった。ハワイを取り巻く情勢を、ハワイ現地のアングロ指導層の視点だけでなく、日本やアメリカ本土での経験を踏まえて複眼的な視点からみていくときに、ハワイをアングロが恒久的に支配していくという考え方はもはや時代遅れであった。スカッダーは、ハワイの魅力のひとつは本土にない「アメリカ主義」への信仰と実態であると考えていた。彼は「アメリカ主義とは?」で、⁶² 移民排斥やアジア系への人種偏見によってアメリカ本土が見失った「アメリカ主義」の真の意味をハワイは責任をもって証明できるとして以下のように述べている。「ハワイをアメリカ化するが、決して准州を白人化しない」し、そんなことは不可能である、ハワイアンや褐色の兄弟姉妹が我々の仲間の市民だからである。ヨーロッパ系同様にアジア系にも政治的特権が平等に賦与されていることを多くの国々に証明することはハワイの責任であり、特権であると。ハワイを「白人化」することに拒否反応をもつスカッダーの主張の背後には、彼のキリスト教に対する基本的な考え方があった。彼は1907年セントラル・ユニオン教会牧師に就任する際に、神による啓示は西洋の独占物ではなく、むしろ「神によってこれらの人々〔アジア人—吉田〕に示された啓示は、キリスト教的良心の光によって彼（女）らが解釈するときには、神の真理の世界的概念をすばらしく豊かにする」とする自らの信仰告白を行っている。⁶³ スカッダーは、キリスト教宣教師によってキリスト教化・アメリカ化してきたハワイがさらに発展するには、「白人」人種中心主義ではなく、アジア人の視点による英知やキリスト教信仰が必要であるという確信を

62 “What is Americanism?,” *Friend* (May 1906).

63 “Central Union Church and Her New Leader,” *Friend*, (December 1907).

持っていた。⁶⁴

スカッダーは、ハワイは世界各国民それぞれに示された神の「世界規模の啓示」が出会いって「統合」化することで、「神の真理の世界的概念」を明示できる理想的な場であるととらえていた。それゆえ、ハワイは世界のモデルとなるべき特殊な使命を神から授かっていたのである。彼はハワイがアメリカ人に与えられるメッセージは「アメリカ主義への信念」やその主義に基づく「人種間交流主義」がアジア人を「西洋化」していること、そしてアメリカでの日本人の遭遇が環太平洋での平和問題に及ぼす好ましくない影響についてであると主張している。⁶⁵ 即ち、西部地域の東洋化を恐れている本土と違い、ハワイでは「全くアメリカ的なコミュニティがあり、ニューイングランドのように教育に専心し、我々の国家的理念、宗教的公平さ、社会正義、そして人種間同胞主義が支配している」ので東洋化を恐れることは全くない。むしろ我々にはパワーがあり、極東出身で最速の成長を遂げている有権者を「愛国的に変身させ、知的で、忠誠心のある、道徳的な市民」に成長させていると説明している。そして最終的に重要なことは、我々の制度を防衛するのに必要な厳格さを前提に、東洋からの移民にヨーロッパ系と対等の帰化権を認めることである。ハワイが訴えたいことは「他の人種と平等にアジア人を遭遇すること。アジア人が教え、実践していることを相互的に学習すること。アジア人は人間であり、真に神の息子であり、本当の兄弟姉妹であり…アメリカ化可能である」とあると述べた。

神の下にある偉大な家族の一員であるという意味での同胞主義が体現しつつあるハワイを、人種偏見の渦巻くアメリカ本土が目指すべきモデルとして位置づけようというスカッダーの考え方とは、その後も一貫していた。ハワイは「人種的融合の実験場」の世界的モデルであるという1920年代になって HEA が提唱する考え方とは、早くも1908年の「ハワイの宿命」に登場する。⁶⁶ 彼はこの文章で、ハワイでは同胞愛が機能することで、相互に排他的で戦闘的な人種集団達が混合してひとつの社会システムを形成しているとする。そして、ハワイはもはやアメリカのためではなく世界のために存在する。世界では適者生存の考え方が浸透しているのに対して、ハワイではアジアとアメリカ両方の文明が相補いあうことで「新

64 スカッダーはこの考え方を20年代でも主張し続けた (“American Churches and the Orient,” Address Delivered in Boston, Mass., December 4, 1920, Before the Federal Council of the Churches of Christ in America at its Fourth Quadrennial Meeting by Doremus Scudder, Friend (January 1921)).

65 “The Cure of the Friendly Isles,” *Friend* (June 1916).

66 “Hawaii’s Destiny,” *Friend* (October 1908).

しい高貴な世界文明」を生み出して、「将来生まれる宇宙的人種を生き残らせ、豊かにする」。それゆえハワイは関税無しの港となり、世界の相互理解のための高等教育機関が設立され、世界伝道について協議する最適地となるという「世界規模の宿命」をもっていると述べている。

さらにスカッダーはハワイを世界におけるキリスト教宣教センターまたは要塞ととらえていた。彼は1909年に ABCFM より、本土中部地区での外国人伝道の統括者として招聘を受けたが、断っている。彼はハワイでも ABCFM の事業を前進させる無数の機会があると主張し、その理由を以下のように述べている。なぜならばハワイは「将来と希望の偉大な太平洋問題のセンター」であり、すべての人種間の運動の中で最も有力なものを手助けできるし、アジアとアメリカを密に繋ぐ点で強力な場である、だからホノルル在住の我々は「太平洋世界の宣教センター」としての明白な宿命を認識すべきであると。⁶⁷ さらに彼は、ハワイは「太平洋世界の偉大なキリスト教要塞」となるべきであると主張する。なぜならばハワイは「神の正義の法律と合致して、偉大な大洋からコミュニティが成長し、地球上のどこの人間より人間らしく、本土のどこよりも人種間交流の同胞愛の最も実践的な概念を持つ」からであると述べている。⁶⁸

(2) 日本人のアメリカ化

スカッダーはハワイのキリスト教化・アメリカ化に大きな使命を感じていたが、中でも来日宣教師の経験を持ち、日本人伝道の担い手としてハワイに赴任した経緯もあり、日本人のアメリカ化はハワイのアメリカ化の中でも最重要課題であると考えていた。そのために、アメリカ本土の西海岸で起こった排日問題を懸念し、彼はあらゆる機会を使って、日本人の擁護をおこなった。カリフォルニアでは、1906年にサンフランシスコの学務課が日本人児童を人種分離学校への通学を決定するといふいわゆる日本人学童隔離事件が起り、この事件が国際問題に発展し、日本がアメリカへの労働移民を規制する「紳士協約」を米国政府と結ぶことで、ようやく隔離が解除されるに至った。スカッダーは「日本人問題」で、⁶⁹ 本事件の背後には「頑強な保守主義者」がおり、彼らはデマを使って人種嫌悪や競争への恐怖感をアピールすることで、アメリカ人労働者を萎縮させ、国家に対して「不道徳なアジアが正義を愛するサンフランシスコを威圧するというイメージを

67 “Dr. Scudder Declines Mainland Call,” *Friend* (August 1909).

68 “Hawaii Today,” *Friend* (December 1910).

69 “Japanese Question,” *Friend* (January 1907).

植え付け」ようとしていると批判した。⁷⁰ そしてサンフランシスコは「アジア人を兄弟姉妹として扱うことから始め、彼（女）らを高潔に扱う」というハワイの経験から学ぶべきであると述べた。日本人学童を他集団と一緒に扱わないというのは「不合理の極致」であり、アメリカ共和国の大原則である「物質的、精神的に与えられたものにおいて平等なのではなく、神の偉大な家族の息子達であるという理由においてであり、兄弟が平等であるように平等である」という理念に反することであるとした。それゆえ労働者排斥のための制限法や帰化権の規制の問題についても、「単に皮膚の色や出生地に基づく理由による人種的嫌悪や差別」に走るべきではなく、「人間性」や「同胞愛の基本原則」に抵触してはならないと主張した。スカッダーは紳士協約についても「合衆国のような偉大で、気前が良く、繁栄している巨人は、こうした人々 [日本人－吉田] に対して法律を制定することを恥に思うべきである」、「人種的に好ましくないという理由」で「特別の排斥原則」を設けることは誤っていると批判した。⁷¹

1913年にカリフォルニアでは主に日本人の土地取得を規制する外国人土地法が制定された。スカッダーは土地法の根拠となっている外国人の同化・帰化不能性を批判し、日本人の同化能力は「他の人々同様であり」、日本人は「状況への適応性」をもち、「環境への調和のとれた反応」ができるので、「日本人が良いアメリカ人になれない」はずがないとし、帰化の問題については、人間の連帯性や身体的・精神的類似性、人種の混合性を根拠に、人種に基づく帰化制限を批判した。そして「外交や法律や政治では問題は提示できない。キリスト教のパワー、全人類の同胞性、普遍的な平和の教えのみが切迫した状況を救うだろう」という大隈重信の言葉を引用しながら、「アメリカがモンゴリアンと呼ぶ人々を扱う場合には『全人類は兄弟姉妹である』という言葉を応用しよう。彼（女）らにヨーロッパ人と平等の帰化権を与えよう、彼（女）を兄弟姉妹として正当に名誉をもって扱い、そしてこの大洋の将来に太平洋という名前を反映させよう」と結んだ。⁷² 彼はしかし日本人の同化能力の素晴らしさを、同化を「奴隸的」にするのではなく、「彼（女）自身の個性の要素を付加することで、彼（女）の環境を豊かにする」、すなわちアメリカ的方法を自分なりに活用する能力をもっている優れた資質の持ち主であるところに見いだしていたことを忘れてはならない。⁷³

70 “The Outlook Again,” *Friend* (March 1911) をも参照。

71 “Japanese Exclusion,” *Friend* (March 1907).

72 “Our Nation’s Duty to Japan,” *Friend* (June 1913).

73 “Asia at the Door,” *Friend* (March 1914).

スカッダーは『フレンド』紙で本土の排日論を批判するだけでなく、日本人を擁護する具体的な行動をとった。ひとつは、1914年、小沢孝雄によるハワイの合衆国地方裁判所への帰化申請を支援したことである。スカッダーは、日本人がモンゴリアンであり白人ではないという理由で帰化不能外国人として扱えるかどうかについて、文明の進展具合からみると日本人は白人と解釈できるし、日本人の原始人はモンゴリアンよりもヨーロッパ人と同族であるので日本人をモンゴリアンとすることはできないし、1882年に連邦議会が制定した中国人を帰化不能外国人とする法律でもモンゴリアンは「白人」ではないという判断をしなかったとして、小沢の事例が「白人」の法的な解釈に基づく新法の制定に今後影響する可能性をもつ画期的なものであるので大きな関心をもってみるべきであると述べ、小沢への帰化認可への期待感を表明した。⁷⁴ 1916年にスカッダーは東京ユニオン教会牧師の招聘を受けてハワイを去った後も、『フレンド』編集者として日本人に帰化権を付与するための世論形成に寄与しようとした。⁷⁵ スカッダーはまた、日米の友好関係を維持するという観点からも、日本人への帰化権付与が必須であると主張し続け、⁷⁶ 中国を巡る日米の利権問題についても親日派として日本の中国政策を擁護する発言を一貫して行った。⁷⁷

ふたつめはスカッダーがアメリカキリスト教会連盟協議会（Federal Council of the Churches of Christ in America）が1914年にカリフォルニアで実施した

74 “The Ozawa Case,” *Friend* (April 1916).

75 “The Peace of the Pacific,” *Friend* (March 1917); “Far Eastern Topics,” *Friend* (June 1917); “Far Eastern Topics,” *Friend* (July 1917); “Far Eastern Topics,” *Friend* (February 1918); “Is Militarist Japan Sowing the Wind?,” *Friend* (January 1920).

76 “The Peace of the Pacific, *Friend* (March 1917); “Far Eastern Topics,” *Friend* (June 1917); “Far Eastern Topics,” *Friend* (July 1917).

77 スカッダーはアメリカの日本人移民への処遇は日米関係とリンクしていると認識していた。彼は親日世論形成の牽引者として特に日中関係に関して多くの発言をしていた。彼が編集者である『フレンド』は「日本の行動に対して可能な限り最良の解釈をしている。なぜならば日本は世界列強のひとつであり、日本の中国への行動の解釈は将来的には好意的に影響するから」と親日の立場を公表した（“The Far Eastern Question,” *Friend*, May 1915）。その立場表明通り、膠州問題や日中条約に対して日本の立場を弁護する発言をしている（“Japan’s Crowning Change,” *Friend*, September 1914; “The Far Eastern Question,” *Friend*, May 1915; “The Far East Again,” *Friend*, July 1916）。

啓発運動を、S. ギューリックと共に担ったことである。⁷⁸ 同協議会は日米間の公平な関係樹立を目指して、移民の帰化問題に関するアメリカ国民の理解を深めるために「米日関係に関する15人委員会」(Commission of Fifteen on American Relations with Japan) を設置したが、スカッダーはその委員であった。⁷⁹ 同委員会は、カリフォルニアで行うギューリックを中心とする啓発運動にスカッダーが同行するよう招聘したのである。⁸⁰ 彼は10日間太平洋沿岸で運動に参加して持論である「ヨーロッパ系移民同様に日本人にも帰化権付与を！」を提唱した後、ABCFM の会合、レーク・モホーク会議に出席し、その後ニューヨークとボストンに滞在することになった。スカッダーの役割は、講演活動ではなく、同協議会が決定した行動案を開始する準備をするために指導者達と意見交換をすることにあったという。⁸¹ この親目的な啓発運動はかえって排日派を結束させてしまい、排日法の制定への現地の動きを強めてしまったので、スカッダーは東部で個人的に指導者達（上院議員、下院議員、大手新聞社編集長、影響力をもつ女性）と面談することになったようである。⁸²

むすび

スカッダーを事例にみたキリスト教越境伝道活動の特徴をまとめると以下のようになる。第1に、キリスト教越境ネットワークを日布間及び布米本土間に展開したことである。スカッダーを介して、越境ネットワークが ABCFM 日本ミッションと HEA 日本人伝道部間、小崎弘道と HEA 日本人伝道部間に設立すること

78 S. ギューリックについては、Sandra Taylor, *Advocate of Understanding: Sidney Gulick and the Search for Peace with Japan* (Kent: Kent State University Press, 1984); Izumi Hirobe, *Japanese Pride, American Prejudice: Modifying the Exclusion Clause of the 1924 Immigration Act* (Stanford: Stanford University Press, 2001)、茂義樹「シドニー・ギューリックと排日法案」同志社大学人文科学研究所編『北米日本人キリスト教運動史』(PMC 出版、1991) を参照。

ちなみに、スカッダーはギューリック著『アメリカの日本人問題』を絶賛し、本書は日米間の「戦争を永遠に予防するために完全に適した案を提示している」と述べており（“The American Japanese Problem,” *Friend*, May 1914）、両者の基本的な見解は一致していたと考えられる。

79 “A Great Campaign,” *Friend* (August 1914); Charles S. Macfarland, “The American Japanese Problem and the Churches of America,” *Pacific* (July 1, 1914).

80 個人消息「スカッダー博士」『基督教世界』(1914年8月13日)。

81 “California Campaign,” *Friend* (October 1914); “Working for the Maintenance of Friendly Relations with Japan,” *Pacific* (December 30, 1914).

82 “The Campaign Widens,” *Friend* (December 1914); “American-Japanese Relations,” *Pacific* (December 15, 1914).

とで、伝道活動上の相互協力、ハワイ日本人伝道の基盤確立が進められた。さらに、ハワイの伝道強化のための支援を本土から得るために、HEA とアメリカ本土の伝道団体（AMA）間にもネットワークが設立された。これはハワイ日本人移民のアメリカ本土転航にともなう、日本人伝道者の本土への移動を容易にした。そして20年代以降の日布間、布米本土間キリスト教越境ネットワークの基盤を形成することになる。もちろん、スカッダーは日本人教会の強化・自給を、小崎はハワイに限らず海外在住日本人への伝道者養成をそれぞれ目的としており、認識が完全に一致していたわけではない。

第2に、政治的アイデンティティにおいては、アメリカ本土の「人種」的偏向に対しハワイ・モデルを打ち出して批判した。スカッダーはアメリカ化をキリスト教同胞主義に基づく政治的平等・公平性ととらえており、ハワイのみがその理念を体現した人種・民族融合のモデルを実現する実験に成功する可能性をもつていると過大評価し、人種主義的偏向のみられるアメリカ本土を批判した。こうした同胞主義の考え方には、ハワイ現地においては1917年に設立したパン・パシフィック・ユニオン（Pan-Pacific Union, Alexander H. Ford が1911年設立の Hands-Around-the-Pacific Club から発展）など現地の国際主義者の思いを先取りするものであるといえる。一方で、例えば1909年に日本人が起こしたプランテーションでのストライキに関してスカッダーは『フレンド』紙上で全く取り上げていないというように、ハワイを理想化しそぎている傾向も見受けられる。

第3に、文化的アイデンティティについては、アメリカ化は英語教育を基盤とするならば第2言語を維持しても可能であると考えていた。日本語教育方針では、スカッダーはその言語の必要性を認識しつつも、日本語学校で実施するよりも、公立学校校舎内で課外活動としての無宗派の日本語教室設立を薦めた。20年代において HEA は、移民言語の維持をあくまでも公教育局の統制下で実施し、最終的には廃止するという考え方をもっていたが、27年にハワイの外国語学校取締法が連邦最高裁で違憲と判断された後、公立学校校舎内で日本語教室を実施する活動を進めた。スカッダーは後者の活動を一貫して主張していたことになる。⁸³ 彼が日本語学校を危険視したのは、大半の語学校が仏教会によって設立され、反アメリカ主義の拠点とみなされていたからである。ここにもスカッダーの考える理想郷ハワイは多宗教のオーケストラの舞台であるはずなのに、仏教を安易に反アメリカ勢力と見なしてしまっている。彼の主張はキリスト教中心主義を前提としており、仏教はキリスト教と現実的な利害対立を生んでいることもあって、排除

83 “The Language Schools,” *Friend* (January 1920).

や抑圧の対象とされていたことになる。

第4に、20～30年代のハワイでのキリスト教指導層が展開する伝道・教育運動の起点となった。1920年代になり、第2次オアフ島ストライキが起こってアングロ中心の経済構造が震撼させられたハワイでは、現地で人口的に最大勢力であるアジア系を取り込む形で秩序再編を行おうとしていた。HEAも例外ではなく、特に進歩的指導層は第一次大戦勃発以降各地で展開されたアメリカ化運動を活用しながら、アジア系とのある種の共存共栄を目指し、アジア系第2世代を中心的な対象とするアメリカ化教育活動を重点的に展開した。アジア系2世人口が急増し、将来の政治体制に大きな影響を及ぼしかねない状態になっていたからである。HEAの活動の基調となっていた考え方は、ハワイを世界の「人種間交流の実験場」とするための人種差別の是正、人種間交流活動の推進によるキリスト教・アメリカ市民育成であった。特に全人口の過半数に到達する勢いで増加していた日系集団に対するアメリカ化教育活動は多岐にわたっており、ヌアヌ支部YMCA(Nuuanu Branch Inter-racial YMCA, 1918年設立)のようなアジア系全体を対象とする人種間交流アメリカ化教育や、人種間交流教会クロスローズ教会(Church of the Crossroads, 1924)の設立、YMCA運動から発展して太平洋地域における平和の実現を目指す太平洋問題調査会(Institute of Pacific Relations, 1925～41)に加え、日米人親善協調精神の推進やアメリカ化の奨励、日本人に対する誤解疑惑除去を提唱する排日予防啓発運動(1921～23、奥村多喜衛主導)、日系2世を有用、有力、善良な市民に育成するための日系市民会議(New Americans Conference, 1927～41、奥村多喜衛主導)、「架け橋」となって日米を基軸とする世界平和に貢献できるキリスト教日系2世指導者の育成のためのフレンド平和奨学金制度(Friend Peace Scholarship, 1928～40)及び日本での研修拠点である同志社布哇寮(Friend Peace House, 1936～)にみられる越境教育である。⁸⁴一方で、キリスト教化・アメリカ化の障害物とされる日本語学校規制(1920～27)を進めて外国語学校規制法の制定(1920、23)や公立学校校舎内での日本語クラス設置の運動も進めていった(1929、奥村多喜衛によるチェーンスクール)。スカッダーはこうした活動に関与していた。YMCAが同会館建設のために日本で募金活動を行った際、スカッダーがお膳立てを行ったし、⁸⁵第1回の日系市民会議で彼は日系市民の投票について講演を行っていた。⁸⁶これらHEAの理念や活動はスカッダーの「ハワイのアメリカ化」論や日本人を中心と

84 抽著『ハワイ日系2世』参照。

85 同上。

86 New Americans Conference, Proceeding, 1927.

した伝道・教育活動にその原型をみることができるのでないだろうか。

最後にキリスト教宣教師の越境伝道は、個別の国家・地域内に展開してきたキリスト教史をつなぐ「架け橋」となり、交流史に変える視点を提供する可能性を持つことを指摘して本論を終えたい。第1に、ハワイ・キリスト教史については、キリスト教化とアメリカ化に関する先行研究に、キリスト教会の指導的担い手が異文化体験を持つ宣教師であったことから、ハワイ以外の地域キリスト教史の影響や交流史と関わらせて議論する必要性を指摘できる。第2に、日本キリスト教史については、海外日本人移民キリスト教史に関する基礎研究の蓄積がなされてきているが、必ずしも日本キリスト教史研究に位置づいていない。しかし、小崎の伝道学校の事例や、来日宣教師及び日本人伝道者による移民伝道及び日米友好関係形成のための活躍を組み込んで議論をする必要があろう。第3に、アメリカ・キリスト教史については、アジア系移民のキリスト教史を取り入れた研究が増えて来つつあるが、西海岸の体験に限定されており、しかも、移民の祖国とは分断されたものとなっている。むしろ西海岸とハワイ、さらには移民の祖国との関わり、宣教師の果たした役割をも議論に組み込む必要性を指摘できよう。